

こころをつなぐまちづくり

人権シリーズ vol.59



この作品は心の中に光を持ち、明るいまちづくりをしたいと願って、安岐町人権作品集「ひかり」第2集を発売した時に応募された作品の一つです。

親子と命

安岐中学校三年(応募当時)

田邊 萌



人権―。

それは、生まれながらにして持っている、人としての権利のことです。また、みんなに平等に与えられる、とても大切で尊いものです。そのはずなのに、世の中には人権が侵され、守られていない人もたくさんいます。人権を侵したり、奪ったりする人は、何を思い、なぜそのようなことをするのでしょうか。

しかし驚くことに、理由が特にあるわけでもなく「イライラしていたから」「つい、八つ当たりで」というようなもので人を殺したり、傷つけたりすることが多

いようです。人を殺すということは、その人のこれからの人生も、その家族の大切な存在も、全て奪うということです。そんなことは、どんな理由があろうとも絶対にしてはいけません。その人の人生を背負って生きていかなければならない重み、命の重みを人ごとだと思わず、みんなで考える必要があると思います。「命を奪ったり、傷つけたりする」という事件の中で、私は最近、特に気にしているものがあります。それは、親が子を虐待するというものです。私は親が我が子を傷つけるなんて信じられませんでした。その理由も、「泣いてうるさかった」「世話をするのがいやになった」というようなものです。人間の子どもは、みんな、自分では何もできない状態で生まれてきます。それは、そんなことをする親も同じであり、手がかるのは当たり前です。だいたい、傷つけるくらいならば、生まなければいいのにと 생각합니다。

〜第4回国東市隣保館まつり「こころの川柳」応募作品〜
漱石は既にこころの一部です
太陽の下でいつぱい育つよ

安岐町 一井 伸彦
武蔵町 森 俊輔

大切にされていると感じるときもあります。子どもがそう思うのが、本来の姿であるはずですが、自分の親を恐れ、怖がりすることは、あつてはいけません。子どもと一緒にいたくても、いられない親もいます。同じ場所において、互いに手の届く距離にいたいということが、どんなに幸せなことか、そういう人たちにわかってほしいと思いました。

人権とは、生まれながらにして持っている人としての権利だといいました。しかし、それはそう難しいものではなく、きつと、楽しいと感じたり、笑顔で過ごせたり、幸せだと思えたりしていることだと思えます。そしてそれには、親子のつながりが不可欠だとも思いました。

私は親に、愛情を注がれながら育つたと実感しています。そして、私は今十五歳で、十年後くらいには子どももいるかもしれません。そのときには、自分がそうしてもらったように、自分の子どもも大切に育てたいと思います。家族が、笑顔で幸せに暮らせるように、私は大人になってからも、今のこの考えを決して忘れないようにしたいです。

お知らせ
毎月隣保館で開催している同和問題学習会、人権ビデオ上映会については4月はお休みです。平成23年度は5月からを予定しています。